

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 ジャン・フランソワ・ビレテール著、笠間直穂子訳『北京での出会い もうひとりのオーレリア』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白井, 重範, Shirai, Shigenori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000162

紹介

ジャン・フランソワ・ビレテール著
笠間直穂子訳

『北京での出会い もうひとりのオーレリア』

白井重範

本書は、スイスの中国哲学者ジャン・フランソワ・ビレテール（一九三九―）の著書二冊を一冊にまとめた邦訳である。いわゆる研究書ではなく、回想や随想に分類される作品である。前編「北京での出会い」は、文化大革命直前の一九六三年、スイス人初の留学生として北京に赴いたビレテールが崔秀文（ウエン）と出会い、「革命」という障壁を乗り越えて結婚するまでの経過が描かれる。後編「もうひとりのオーレリア」は、文との死別をきっかけに沸き起こった「情動」に対する考察であり、彼女の死から四年以上書きためた自身の覚え書きを編集し、「わたしたちがなによりよって成り立っているか」を示そうとした試みである。著者はこの二冊により、スイスのフランス語文学に贈られるミシユル・ダンタン文学賞を受賞している。

著者はジュネーヴ大学を卒業後、一年間中国語を学んだ延長で北京への留学を決める。社会主義中国の実情は極めて断片的

な形でしか国外に伝わっておらず、シベリア鉄道経由で未知の国へ中国に赴いた彼を待ちうけていたのは、一般民衆から隔離された箱庭のような生活だった。しかし彼は、出自に政治的な問題をかかえる若き医師文と奇跡的に出会う。政府の監視下で交際し、外交ルートを駆使してついには結婚に漕ぎつける。二人はやがて中国を脱出するが、それで万事めでたしとはならない。文の家族がその後被った苦難を、彼らはその後長らく知ることすらかなわなかった。

後編の題名は、ジェラルド・ド・ネルヴァルの絶筆『オーレリア』（一八五五）からとられている。ネルヴァルが描く、夢あるいは狂気のうちで体験したもうひとつの生は、人の「精神の秘められた内奥」を開示してみせた。この散文詩的小説と同様に、著者は理性による統御を受けつけない「情動の波」の記録が、人間存在の根幹を形作る「なにか」にアクセスする鍵であることを覚る。一切の陰気な語彙（逝去、不幸、お別れ、喪、お悔やみ）は断固拒否する。それらは「ある消失に動転する者を引いた世界に閉じ込め」、「自分の情動にわたし自身があたえるべき感情的価値を、勝手に押し付けてくる」から。喪に服して不在・欠如を受け入れるのではなく、「情動」にとことん付き合うことが肝要だ。

覚え書きには時事刻々と変化する「情動」の様が如実に記されるが、後編全体はそれらを哲学者として分析するもう一つの視線によって支えられている。著者はいう、「広い視野に立つなら、このような激動は豊かな教えをはらんでいる」と。広い視野、自身の「情動」を外面から観察するスタンスを著者が持ち得たのは、彼が学究の人であったからだろう。さもなければ、向かう先は「情動」との中心であったかもしれないのだ。東西の学問を自在に渉猟した著者の学識が、彼に精神的危機を乗り越えさせ、救済をもたらしたのである。

前編は、実は後編の後に執筆された。筆者は精神的危機を超えたその先に、はじまりの日々を位置付け直そうとする。手探りで注意深く記憶をたどっていくような語りが、真実らしさを増幅している。後編とは対照的に、前編の筆致は総じて冷静であり、一九六〇年代前半の北京を一人の留学生として過ごした著者の回想は、現代中国研究者にとって貴重な証言ともなり得ている。

訳者の笠間直穂氏はフランス語圏文学の研究者だが、本書の翻訳から窺える中国現代史や中国文化に関する知識には驚嘆すべきものがある。翻訳自体もさることながら、人名・地名・歴史的事件など、ルビや訳注に至るまでほぼ完璧といつてよい。

底知れぬ奥行きをもつ本書が、この優れた翻訳を通して、日本の多くの読者に届くことを願ってやまない。

(四六判、一三三二頁、みすず書房、二〇二二年十二月発行、定価三六〇〇円＋税)